2 大洋編

山本一力

ジョン・マン

John Mung

Yamamoto Ichiriki

講談

講談社文庫

ジョン・マン 2

大洋編

山本一力

講談社

|著者| 山本一力　1948年高知県生まれ。都立世田谷工業高校卒。14歳の時に上京し、高校卒業後、旅行代理店、広告制作会社勤務、航空会社関連の商社勤務などを経験。'97年に「蒼龍」により第77回オール讀物新人賞を受賞。2002年、『あかね空』（文春文庫）で、第126回直木賞を受賞する。他の著書に、『損料屋喜八郎始末控え』『背負い富士』（ともに文春文庫）、『大川わたり』（祥伝社文庫）、『だいこん』（光文社文庫）、『欅しぐれ』（朝日文庫）、『いっぽん桜』『辰巳八景』（ともに新潮文庫）、『峠越え』（PHP文庫）、『深川黄表紙掛取り帖』『牡丹酒　深川黄表紙掛取り帖（二）』（ともに講談社文庫）がある。

ジョン・マン 2　大洋編（たいようへん）
山本一力（やまもといちりき）
© Ichiriki Yamamoto 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年10月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———大日本印刷株式会社
製本———大日本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277951-7

講談社文庫

ジョン・マン 2

大洋編

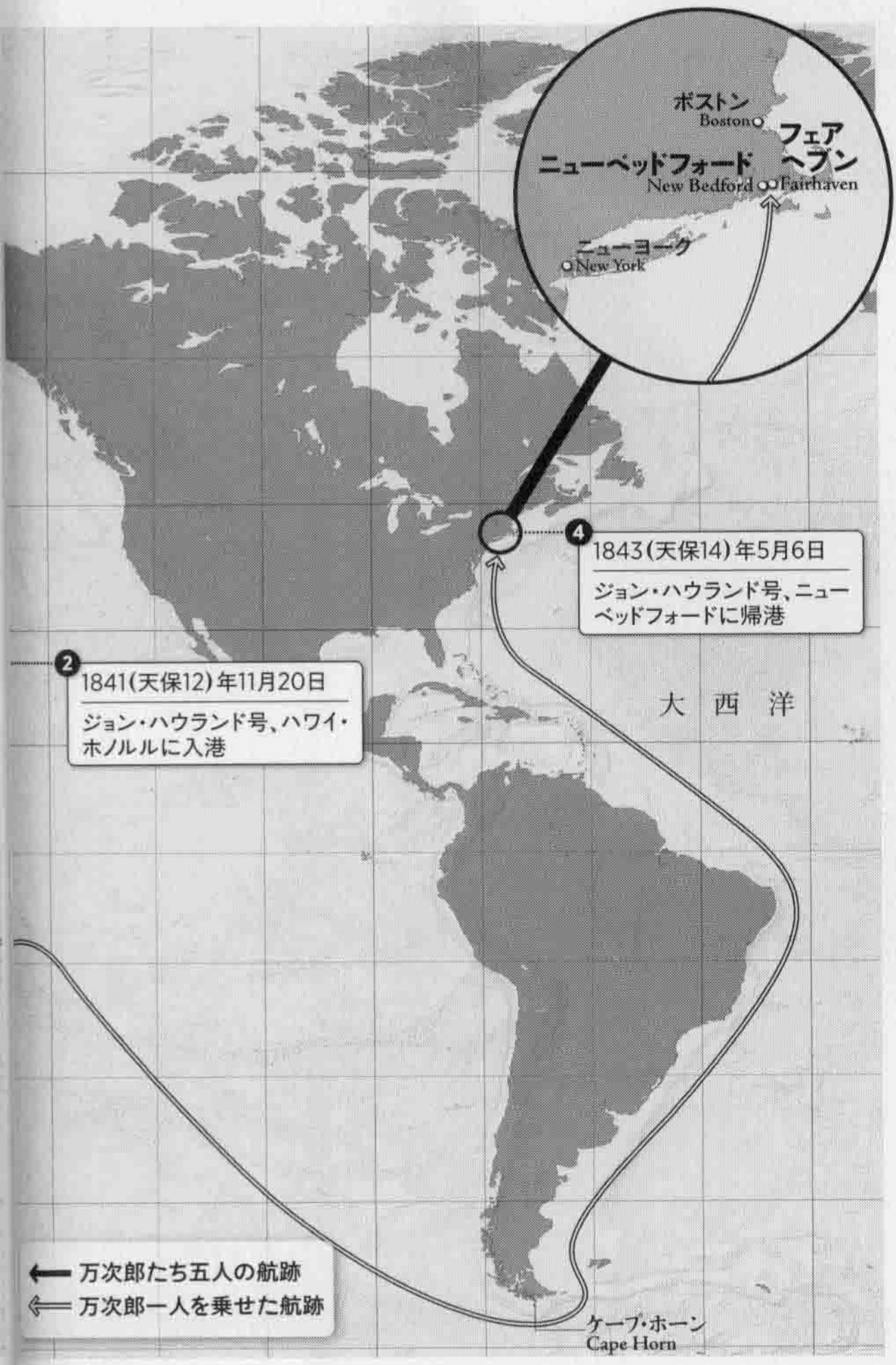
山本一力

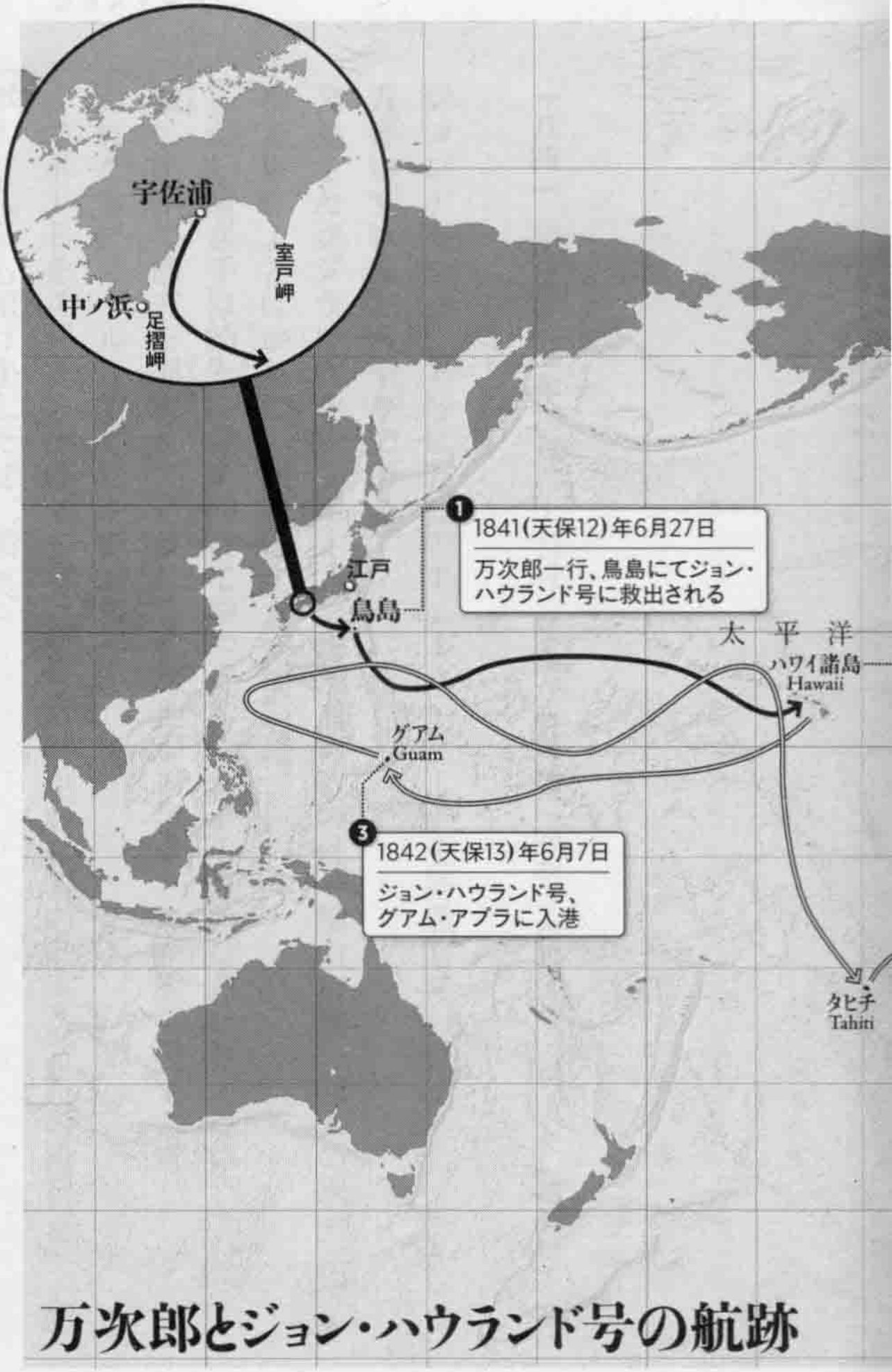
講談社

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ジョン・マン 2

大洋編


ボストン
Boston
ニューベッドフォード
New Bedford
フェアヘブン
Fairhaven
ニューヨーク
New York
4
1843(天保14)年5月6日
ジョン・ハウランド号、ニューベッドフォードに帰港
2
1841(天保12)年11月20日
ジョン・ハウランド号、ハワイ・ホノルルに入港
大西洋
万次郎たち五人の航跡
万次郎一人を乗せた航跡
ケープ・ホーン
Cape Horn



万次郎とジョン・ハウランド号の航跡

一

一八四一（天保十二）年六月二十七日。鳥島から母船に向かうホエール・ボート（捕鯨ボート）

ジョン・ハウランド号は五杯のホエール・ボートを搭載していた。

五杯いずれも六人乗りである。

発見したクジラに向かってボートを漕ぎ進めるのは、腕力自慢の四人の水夫だ。オールも折れよとばかりに、四人は全力で漕いだ。

しかし漕ぎ手は舳先に背を向けて乗っており、ボートの進路は見えない。

艫に座って前方を凝視している二等航海士が、ボートの舵取り役である。

「おれたちはオールを漕ぐしか能がねえ」

「このボートをクジラめがけてまっしぐらに向かわせるのは、あんたの役目だ」

「ボートも命も預けましたぜ、船長」

ホエール・ボートの上にいる間、オールを漕ぐ水夫たちは敬(うやま)いを込めて航海士をオフィサーではなしにキャプテンと呼んだ。

ボートの舳先は、銛打(もりう)ち（ハープーナー）の指定席である。銛打ちと航海士は、捕鯨船での待遇は同格だった。

しかしホエール・ボートの上にいる限りは、銛打ちも航海士を船長と呼んで敬った。

クジラに銛を打ち込める近さにまでボートを接近させるには、航海士の巧みな舵取りが不可欠である。

「寝ている子を起こさぬ気配りと同じように、忍び足でクジラに近寄るのが肝心(かんじん)だ」

腕利(うでき)きのホエール・ボート船長（航海士）は、クジラに二十二ヤード（約二十メートル）まで近寄ったあとは、漕ぎ手にオールを引き上げるように命じた。

「パドル（櫂(かい)）に持ち替えろ」

ささやき声で命じられた漕ぎ手四人は、パドルを使ってクジラの背後から接近した。

いつ、どこで、オールをパドルに持ち替えるのか。

気づかれぬように、どの角度からボートをクジラに近づけるのか。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

確かな判断と卓抜な操船技なくしては、いかに腕利きの銛打ちといえどもクジラに銛は打ち込めない。

ゆえにホエール・ボートの上では、銛打ちも水夫も、航海士を船長と呼んで指図に従った。

ジョン・ハウランド号に搭載した五杯のホエール・ボートは、四人の航海士とひとりのボースン（水夫長）が舵取り役である。

ボースンは航海士ではなかった。ヒラの乗組員の束ね役に過ぎない男で、航海士よりも一段格下である。

しかしボースンの指図なしでは、ひとりの水夫も動かない。

ジョン・ハウランド号を滑らかに走らせるには、ボースンこそがキーマンだった。

「ホイットフィールド船長になら、安心して命を託すことができる」

ボースンは身体の芯からホイットフィールド船長を尊敬していた。

「もしも船長に飛び込めと命じられたら、闇夜の海にでも迷わずに飛び込む」

これほどに船長を信頼しているボースンである。

トリシマで五人を救ったいま、あらためてボースンは船長に深い敬意を抱いていた。

三杯のボートを出したのは、まことに正しい判断であった、と。

助けを求める人影をトリシマに発見するなり、ホイットフィールド船長は停船を命じた。

船長の命令を副長のガントレットはボースンに伝えた。

ボースンは大声で水夫に指図を与えた。

ニューベッドフォードを出帆(しゅつぱん)してから、すでに六百日余の日々が過ぎていた。途中で逃亡を図った水夫もいたが、多くはまだ船に残っていた。

ボースンの指図で、水夫たちは敏捷(びんしょう)に動いた。三本マストの帆(ほ)を巧みに操り、ジョン・ハウランド号は滑らかな停船を成し遂(と)げた。

マストの物見(ものみ)は、本船とトリシマの距離が二百ヤード（約百八十三メートル）だと告げた。

ホエール・ボートなら、三分かからずに行き着ける距離だ。

「いつに変わらず、見事な止め方だ」

ボースンの指図を褒(ほ)めたあと、船長は副長に目を向けた。

「救助には三杯のボートを出すように」

「イエス、サー」
船長に敬礼したガントレットは、ボースンを従えてホエール・ボートに近寄った。
「ボートを三杯出すということは、相当な人数の漂流者がいるものと、船長は判じておられるようだ」
ガントレットの言葉に、ボースンは深くうなずいた。が、気持ちの底には引っかかりを覚えていた。
望遠鏡でトリシマの人影を見つけた物見は、手を振って助けを求めているのは五人だと報告していた。
当然、船長はその人数を知っている。相当な人数とは、五人のことなのだ。
五人の救助なら、ボートは二杯出せば充分だ。なぜ三杯おろすのかが、ボースンには得心がいかなかった。
「マストの物見は、島にいるのは五人だと言っています」
二杯で充分ではないかと、ボースンは自分の考えを副長に明かした。
船長に絶対的な信頼をおいているボースンが、なぜ命令に疑問を挟むのか？
副長にはその理由が分かっていた。
ボートを三杯おろすのと二杯とでは、上げ下ろしの手間がまるで違ってくる。

ジョン・ハウランド号は、左右両舷(りょうげん)に二杯ずつのホエール・ボートを積んでいた。残る一杯は艫に積んでおり、これは予備である。

クジラを追うのに、五杯すべてを使うことは希(まれ)だった。

おろすのが二杯なら、右舷のボートだけでいい。右舷に積んでいる二杯は、直(ただ)ちにおろせるように常から準備を済ませていた。

三杯なら左舷の一杯の上げ下ろしも必要となる。シートを取り外すのも手間だし、漕ぎ手に指名する水夫も増えるのだ。

鯨漁に向かうのであれば、何杯おろそうとも文句はなかった。

しかし今回は漂流者の救助である。五人を助けるなら二杯で充分だというのが、ボースンの判断だった。

「船長が判断されたことだ」

このひとことで、ボースンは口を閉じた。

だれをボートの舵取りにするかは、副長はボースンの意見を聞いた。一瞬も迷わず、ボースンは名を挙げた。

「ベン・トムスンとボブ・カッツ、それにわたしが行きます」

副長は了解のうなずきを示した。

トムスンもカッツも、ともに三十五の同い年だ。ふたりとも捕鯨船乗船歴七年のベテラン二等航海士で、ボースンは両名の舵取り技量を買っていた。

同い年だが、気性も身体つきもまったく違っていた。

トムスンは百八十センチ、八十キロの大男だ。赤毛の縮れ毛で、瞳は底まで透き通った青である。

「赤毛と青い瞳が、色味を引き立て合っているからよう。港の女は夢中になるんだ」

寄港地の酒場で、女が群れになって寄ってくる。これがトムスンの自慢だった。

透き通った瞳に気を許した者は、たちまち思い違いに気づかされる羽目になる。

「あんた、息がくさいぜ。それ以上はおれに近寄らないでくれ」

だれに対しても遠慮のない物言いをするのが、トムスンの流儀だった。

百六十センチ、五十五キロのカッツは、ジョン・ハウランド号の水夫のなかでは小柄である。丸顔で茶色の髪、茶色の瞳をしたカッツは、親しみやすさを感じさせた。

しかしうかつに気が許せないのは、トムスン同様である。

水夫のなかで、カッツはだれよりも気が短い男だ。

「なんだか可愛らしい顔ねえ」

これを言われると、カッツの丸顔は朱に染まった。両腕に血筋が浮かび、素手で分

厚い樫の卓を叩き壊す腕力を見せた。

ジョン・ハウランド号で、腕相撲のチャンプはカッツである。大柄なトムスンが利き腕を膨らませて挑みかかっても、呆気なくカッツにねじ伏せられた。

こんなふたりを選んだのは、ボースンなりの計算があったからだ。

漂流者は五人だというが、素性も国籍も分かってはいない。ほぼ確かなことは、英語は通じないだろうということだった。

いまは助かりたい一心で、漂流者たちは懸命に手を振っている。しかし助けたあと、どんな振舞いに出るかは神のみぞ知る、だ。

大柄でいかつい顔のトムスン。

小柄で丸顔のカッツ。

見た目の違いが際だっているふたりを連れて行ったときは、いままでも上手くことが運んでいた。

もしも暴れ出したとしても、相手は五人だ。しかも無人島トリシマの漂流者である。

危ない武器を隠し持っている恐れは九分九厘ないだろう。

トムスン、カッツがわきにいれば、五人を相手に戦っても負ける気遣いはなかっ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com